

≪新刊紹介≫

上垣豊編著『はじめて学ぶフランスの歴史と文化』

石原 香

本書は、中世から近現代にいたるフランス史の入門書であり、ミネルヴァ書房が刊行する『はじめて学ぶイギリスの歴史と文化』、『はじめて学ぶイタリアの歴史と文化』の姉妹編にあたる。タイトルが示すように、本書ではフランスの歴史と文化に重心が置かれている。入門書として我々が想像するような、政治史の羅列的な叙述というよりも、本書は文化史の記述を多く取り込んでいる。このように、フランスが歴史と文化を大事に扱ってきたことを読者に理解させるのが、本書の狙いである。本紹介では、まず本書の構成と内容に触れ、次に本書の特徴を、歴史と文化の点から述べることにする。

本書は全10章からなる4部構成で、その構成は時代ごとに区分されている。また各章の終わりには、「歴史の扉」と題した16個のコラムが挿入されており、ここでは美術や食文化、モードやメディアといったテーマが扱われる。近代フランス史を専門とする上垣豊氏を筆頭に、それぞれの専門分野の研究者が最新の研究動向を取り入れて、フランス史の概要を述べている。

第I部「フランスの生成——15世紀まで」は、「フランス」という国の名称の由来となるフランク人の話から始まり、15世紀にまでおよんだイングランドとの百年戦争までを扱う(第1章・第2章)。第1章は、中世におけるフランス王国の歴史の変遷を政治と宗教の観点から辿り、続く第2章は、中世のフランス人の社会と文化に触れる。

第II部「ルネサンスからバロックへ——16～18世紀」では、16世紀から18世紀までの近世フランスについての概要が述べられる(第3章・第4章・第5章)。イタリア・ルネサンスとの接触から、1589年まで八次にわたり繰り返されたカトリック対プロテスタントの宗教戦争(ユグノー戦争)までを第3章で、ルイ13世とルイ14世の治世、いわゆる「絶対王政」の時代を第4章で扱っている。そして第5章は、「啓蒙の世紀」と称される18世紀のフランス社会を対象に、啓蒙思想の展開、サロンやアカデミー、フリーメーソンの興隆、都市空間における衛生状態の改善などを取り上げている。

続く第III部「革命と国民の時代——19世紀」では、フランス革命から「ベル・エポック」の時代、ようするに第一共和政や第二帝政、第三共和政など、フランスがさまざまな体制を経験した19世紀が扱われる(第6章・第7章・第8章)。ここでは、革命の遺産を受け継ぎつつ、フランスが国民統合へと向かっていく過程が述べられる。

最後の第IV部「2つの大戦と欧州再編のなかで——20世紀」は、20世紀における2度の世界大戦から、21世紀のフランスまでを対象とする(第9章・第10章・終章)。特に終章は、マクロン政権の誕生と、2018年11月から翌年春にかけて、燃料税の値上げ反対を掲げて起こった「黄色いベスト運動」という社会運動で締めくくっており、2020年現在のフラ

ンス社会の動向を理解することができる。

以上が本書の内容である。前述の通り、本書は歴史と文化に注目した叙述スタイルとなっているが、これは「入門書」として、大学の学生のみならず高校生や教師、さらには一般の読者にも興味・関心を持ってもらえるよう考慮した結果である。学生が大学の講義において、レポートの作成や予習・復習をおこなう際に、「教科書」として本書が利用されやすいように、また、一般の読者でも興味深く本書の内容に溶け込めるように、文化史の記述に紙幅を費やしている。

各章は政治的なフランス史の流れを叙述するとともに、フランスの文化・社会にかんするトピックも随所に取り入れている。例えば、前述のように第2章は、中世フランスの社会と文化について扱っている。そこでは、騎士が何よりも名誉を誇りにして、侮辱されたと感じた場合には武力による自力救済の手段に訴えたこと、そのような暴力がエスカレートしないよう、仲裁者による説得など一定の歯止めの仕組みが存在したことに加え、農村での生活や都市の環境・衛生問題なども紹介されている。本章からは、中世の人々がどのような環境のもとで生活し、どのような感性を持ち合わせていたか読み取れるだろう。さらに、「はじめに」でも触れられているように、本書には多くの作家・知識人が登場する。特に第III部以降は、非常に多くの画家・作家・科学者・哲學家について紹介している。本書で取り上げられた作家・知識人の作品は日本において数多く翻訳されており、彼らの作品を読みたいと読者が思うように、本書では工夫がなされている。

そして本書の最大の特徴は、以下のような16個のコラムにある。①騎士道精神と宮廷風恋愛、②ゴシック美術——パリ、ノートルダム大聖堂とその周辺、③祝祭と恩赦、④宮廷社会と女性、⑤文学と修辞学の伝統、⑥美術展と美術館、⑦宗教と社会、⑧花の都パリ、⑨食文化、⑩モード、⑪ブルターニュ、⑫余暇の過ごし方、⑬フランスの映画、⑭フランスの音楽文化、⑮家族と女性、⑯メディアとジャーナリズム。タイトルを一瞥するだけでも、テーマの多彩性が読み取れよう。そしてこれらのコラムは、単に各テーマの歴史の変遷の叙述で済まされるのではなく、現代の問題関心と絡めて述べられている。パリのノートルダム大聖堂の焼失をうけて、どのような修復・再建方法が適切か、何故パリが「花の都」と呼ばれるにいたったのか、長らく少子高齢化に悩まされていたフランスが、いかにして「子どもを産み育てやすい国」というイメージを定着させていったかというように、現代社会に生きる我々が抱くさまざまな疑問から、当コラムはその歴史と将来の展望を論じている。これらのコラムを読むことで、フランスの歴史・文化をより身近に感じることができるだろう。

本書は文化史の記述が多いぶん、政治史の部分はいくぶん簡略化されているが、フランス史をあまり知らない人でも理解しやすい内容となっている。さらに研究者にとっても、フランス史の展開を整理し、また最新の研究動向を確認する際に、本書は大変役立つと考えられる。フランス史の入門書は数多く存在するが（最近では、杉本淑彦・竹中幸史編『教養のフランス近現代史』（ミネルヴァ書房、2015年）、平野千果子編『新しく学ぶフランス

上垣豊編著『はじめて学ぶフランスの歴史と文化』

史』(ミネルヴァ書房、2019年))、本書ほど多様なコラムや図像・写真を用いてフランスの歴史と文化を扱ったものはないだろう。多くの読者が本書を読んでフランスの歴史と文化に関心を抱いてくれることを、フランス史を研究する者として願う。

(A5判 346頁 2020年3月 ミネルヴァ書房 税別3200円)

(京都大学大学院修士課程)